もっといい明日が見えてくる —Letters from Gnoble

Gno G-let グノレット

vol.12
2013年11月発行

中学受験グノーブル

グノの6日間 冬期講習 12/26〜29・1/4・5

中学受験グノーブル
小6年：目前の入試本番に向けて、算数を仕上げる6日間
小5年：受験学年を見据えて、小5算数を仕上げる6日間

個別指導グノリンク
小4〜6年：1コマからお申込みできます。

くわしくはHPをご覧下さい。
www.gnoble.com

Gnoble 中学受験 グノーブル　GnoLink 個別指導 グノリンク

大学受験グノーブル

冬期講習日程

対象 中1〜高3・既卒生

冬期講習に関するお問い合わせ 03-5371-5487

Aターム	12/21(土)〜	12/24(火)
Bターム	12/26(木)〜	12/29(日)
Cターム	1/4(土)〜	1/7(火)

2013年 大学受験合格実績 7期生 在籍397名

東大各科類73名

理科Ⅰ類	21名
理科Ⅱ類	8名
理科Ⅲ類	3名
文科Ⅰ類	18名
文科Ⅱ類	14名
文科Ⅲ類	9名

国公立大165名

京都大	6名
一橋大	17名
東工大	8名
東外大	5名他

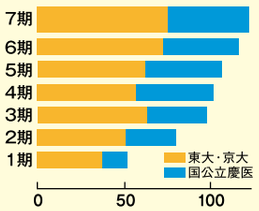
東京大 73名
HAVERFORD COLLEGE 1名
国公立慶医 45名
慶應大 190名
早稲田大 191名
上智大 53名

医学部医学科130名

東京医科歯科大(医)	2名
東北大(医)	3名
千葉大(医)	8名
筑波大(医)	3名
横浜市立大(医)	2名他
※国公立大医 計37名	
慶應大(医)	8名
東京慈恵医大(医)	19名
順天堂大(医)	15名
日本医大(医)	19名他
※私立大医 計93名	

東大・京大+国公立慶医合格実績

7期在籍397名中	124名
6期在籍346名中	115名
5期在籍311名中	105名
4期在籍307名中	102名
3期在籍271名中	99名
2期在籍232名中	79名
1期在籍187名中	52名



GnoTube Gnobleを動画で体験!
どんな先生がいるんだろう?
どんな授業をするんだろう?
グノーブルは何が違うんだろう?
www.gnoble.com/gt/

新宿本館 〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F
アクセス：JR新宿 サザンテラスロ 徒歩1分(南口徒歩2分) JR代々木 北口 徒歩5分 京王新線、都営新宿線、都営大江戸線 出口2 徒歩0分

渋谷本館 〒150-0002 渋谷区渋谷1-7-6 青山CRビル1F
アクセス：JR渋谷 宮益坂口 徒歩5分、東京メトロ渋谷 11番出口 徒歩4分 「渋谷ヒカリエ」青山通り方面出口 徒歩1分

お茶の水本館 〒101-0062 千代田区神田駿河台2-5-5 村田ビルディング3F(1Fスターバックスコーヒー)
アクセス：JR御茶ノ水 御茶ノ水橋口 徒歩2分、東京メトロ御茶ノ水 徒歩3分 東京メトロ新御茶ノ水 B1出口 徒歩4分

大学受験グノーブル事務局【新宿本館・受付】
お問い合わせ 月曜〜金曜15:30〜21:00/土曜14:00〜21:00/日曜休館(説明会・テスト日除く)
〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GS ビル1F
TEL 03-5371-5487
FAX 03-5371-5488

2013年度 開講科目【中1・2・3】英・数【高1】英・数・古【高2】英・数・物・現・古【大学受験生：高3・既卒】英・数・物・国・小論

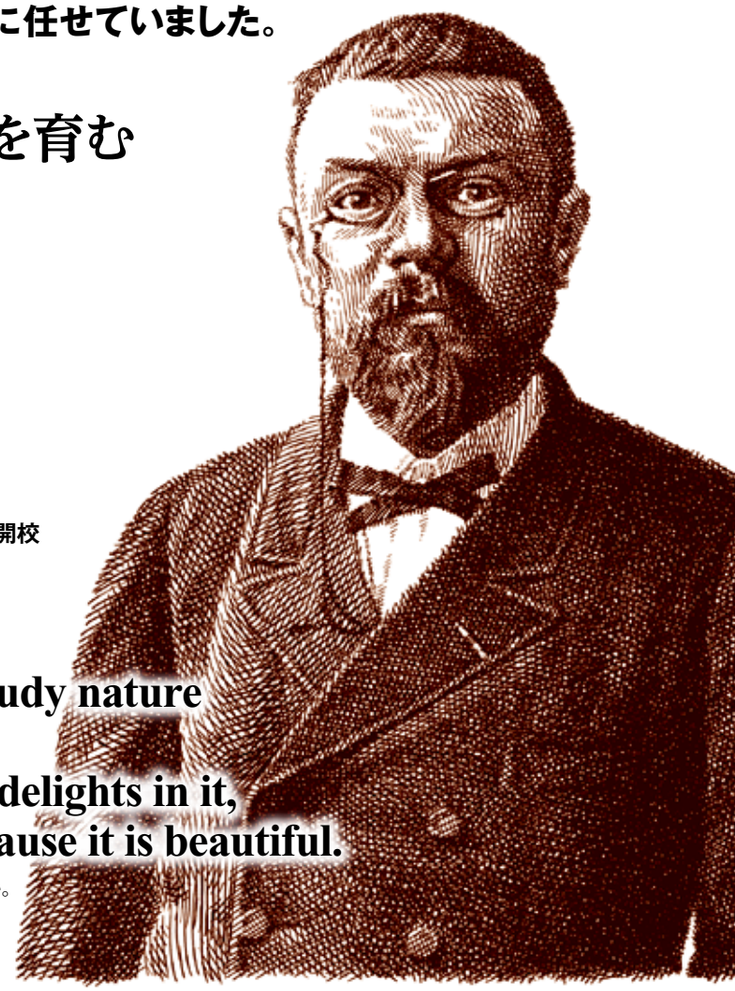
—知の力を活かせる人に—
Gnoble 大学受験 グノーブル
新宿・渋谷・お茶の水
www.gnoble.co.jp
グノーブル総合案内 www.gnoble.com

保護者座談会2013
グノから帰ってきた子どもの顔は、いつも輝いていた。私たちは安心して、グノーブルに任せていました。

Gnoble Principles Vol.2
「学ぶ力・学ぶ意欲」を育む
グノーブル代表：中山 伸幸

グノーブルOBインタビュー
僕らが参加した『日米学生会議』とは
東京大学文科一類2年(栄光学園出身) 川口 真(かわぐち まこと)さん
東京大学大学院修士課程1年(開成出身) 高田 修太(たかだ しゅうた)さん

グノーブル新展開
中学受験グノーブル、スタート!
東京校、自由が丘校、成城学園校、西船橋校が開校
『G脳(グノ)-ワークアウト』算数を刊行
英会話グノキッズ、10月スタート!



The scientist does not study nature because it is useful; he studies it because he delights in it, and he delights in it because it is beautiful.

科学者は実用性のために自然を研究するのではない。
自然に喜びを感じるからこそ研究し、
自然が美しいからこそ喜びを感じるのである。

ジュール＝アンリ・ポアンカレ
Jules-Henri Poincaré (1854年4月29日〜1912年7月17日)
数学、数理物理学、天体力学などに重要な功績を残したフランスの博学者。彼が提唱した位相幾何学における「ポアンカレ予想」は完全に証明されるまで約100年を要した。

Gnoble GROUP

Gno-let vol.12 発行：株式会社富士教育出版社 〒162-0816 東京都新宿区白銀町 5-15
監修：グノーブル編集部 制作・編集：日経 BP コンサルティング 表紙イラスト：斉藤高志
GL12-1311-1

グノから帰ってきた子どもの顔は、いつも輝いていた。私たちは安心して、グノーブルに任せていました。

ご出席いただいたお母さま：大久保まゆみさま　長谷川弥生さま

大久保彩さん（文Ⅱ・桜蔭出身）と長谷川哲也さん（文Ⅱ・開成出身）は、共にグノーブルで英語、数学、国語を学び、今年東大に合格した７期生です。先の『東大合格特集号』にもご登場いただき、グノーブルで学んだ日々の思いの丈を話してくれました。そんな２人を、お母さまたちはどんな気持ちで見守っていらしたのか。また受験生を持つ母親として、グノーブルをどのように見ていらっしゃったのか。今年もリアルな保護者の声をお届けします。

（取材・文　吉村高廣）

東大に入学して、子どもたちはいま…

長谷川：いろいろなことが学べて「とても楽しい」と言っています。ただ、男の子なのであまり詳しく話してはくれませんね。「選択科目は何を取ったの？」と聞いても、スマートフォンで撮影した時間割がメールで送られてきたくらいですから（笑）。それを見たら「この子、いったい何がしたいのかな？」と思ってしまうほどあれこれ取っているんです。息子いわく、自分が興味を持って取り組めるものを見つけるのが今のテーマとかで、それでいろいろ取ってみたらどれもこれも面白くて、改めていい学校に入ったと喜んでいます。

サークル活動も、運動系にするか文化系にするか迷っていたようですが、結局『ドリームネット』というキャリアサポートを行うサークルに入りました。これは、東大を卒業してさまざまな企業に就職されたＯＢやＯＧの方々をお呼びして講演会などを企画するサークルで、そちらの活動でもいろいろと刺激をもらっているようです。

大久保：うちの娘は勉強以外のことしか話してくれません（笑）。高校の時には美術部に入っていたのですが、「大学に入ったら絶対チームスポーツをやりたい」と言って、結局、体育会のラクロス部に入りました。朝５時に起きて朝練に行っています。それだけでも大変なのに、中高の時から熱中していた『競技かるた』も続けていまして、朝から晩まで充実した毎日を送っているようです。ただ、そんな調子で土日もなく活動しているので、あまり大学生活の話も深く聞くことができないんです。

大久保 まゆみさま
東大文科二類１年（桜蔭出身）
大久保 彩さんのお母さま

子どもたちを成長させた“グノーブル効果”とは？

長谷川：精神的に強くなったと思います。中学受験は親子の二人三脚のような部分もありましたが、大学受験は本人ががんばらなければなりません。息子はあまりコツコツとがんばれるタイプではないので、切羽詰ってきてからやっと、あれこれ自分で考えながら勉強していたように思います。それでもグノーブルに楽しそうに何年も通えていたのは、いい仲間と素晴らしい先生に恵まれたからだと思います。

もちろん仲間とはいっても、すごく優秀な生徒さんばかりと聞いていましたので、当然そうした中での切磋琢磨もあったと思います。ただ、学校とは違った環境で、同じ目的を持った仲間と分かり合え、支え合えたことは大きかったのではないでしょうか。

生徒さんたち一人ひとりを、いつでも温かく見守ってくださった先生方のお力もあって、すごくアットホームな環境の中で、勉強だけでなく心の面でも成長したなと親の目からは思います。

印象的だったのは、塾から帰ってくると、いつもいい顔をしていたことです。疲れてはいたと思うんですが、それでも、すごく楽しそうに、グノーブルの授業であったことや先生の様子を話していました。エネルギーを頂いて帰ってくるという感じでしょうか。普段はあれこれ話さない息子でしたが、グノーブルのことについては本当によく話してくれました。それが、「いい先生といい仲間に囲まれて、楽しい時間を過ごしてきたんだな」という安心感につながっていました。

大久保：確かにグノーブルから帰ってきたときは、長い一日が終わって疲れてはいたのでしょうが、うちの娘もとても充実した表情をしていましたね。

また、グノーブルで英語を学ぶようになって、一つのことに関してあらゆる方面から追求して、自分が納得するまで突き詰める習慣がついたように思います。疑問に思ったことや興味を持ったことに対して調べたり考えたりする楽しさをグノーブルで学んだんじゃないでしょうか。

娘は、グノーブルの先生や友だちのことを、第二の家族のように考えていたと思います。先生のことを心から信頼していましたし、優秀な友だちといい意味で競い合うことで確実に力も伸びていましたから、「ここにいれば間違いない」と安心感が持てていたようでした。娘がそんな様子だったからこそ、私の方も安心して見守ることができたんです。

長谷川 弥生さま
東大文科二類１年（開成出身）
長谷川 哲也さんのお母さま

長谷川：グノーブルに来れば自分の居場所があり、支えてくれる仲間がいて、それを理解してくださる先生がいらっしゃる。今、大久保さんがおっしゃった第二の家族というのは私もピッタリな表現だと思います。

母親として、子どもとどう向き合ってきたか？

長谷川：いろいろ気になってしまって、「あれこれしたいな」という気持ちはありましたが我慢していました。実際のところ、子どもの大学受験で母親ができることは健康管理くらいかなと思います。塾から帰ってきたら温かいお風呂に入ってゆっくり休めるような環境づくりや、食生活に気を配ることでしょうか。

正直なところ、私はいろいろ言いたくなってしまうタイプなんです（笑）。でも、私が言ってもぜんぜん頭には入っていないというか…。結局、「言ってもしようがないのかな」と諦めて、あまりあれこれ言わないようにしていたんです（笑）。

主人の仕事の関係で、息子は５歳から10歳までアメリカのシカゴで現地校に通っていて、基礎的な英語は身についていました。そうしたこともあって主人としては、英語を錆つかせずに、さらに磨いていって欲しいという思いを持っていました。ところが、息子が高２だった秋に、再びアメリカに赴任することになってしまったんです。

主人は、受験のことで息子の相談に乗ったり、アドバイスもする心づもりでいたようですが、それが叶わなくなって、出発前にグノーブルの先生に面談をお願いしていました。英語力をしっかり磨いていただきたいということももちろんあったようでしたが、自分に代わって、受験全般について、父親代わりに近いような存在として面倒を見ていただきたいという思いもあったようです。

受験期の子どもというのは、外の師匠と申しますか、外で出会う、尊敬できる先生や先輩のアドバイスを聞く年代だと思います。そうした意味では、息子自身がその先生のことをとても信頼して尊敬もしていたので、主人としても、何かあったときはぜひともお力になっていただきたいと考えていたのです。

大久保：私も長谷川さんと同じで、子どもがなるべく生活しやすい環境を整えてあげることくらいしかやっていません。娘の場合は、わりとコツコツ勉強するタイプでしたのであまり心配はしていませんでした。

むしろ、グノーブルに通うようになってから、こう

※記事中敬称略

と決めたらそれを徹底してやるようになって、あまりにも根をつめすぎているような時は、「ちょっと休憩したらいいのに」と、そっちの方が心配でした。でも、結構メリハリをつけるのは上手だったかも知れません。20分くらいダラダラしていたかと思うと、その後はスパッと切り替えてまた勉強に集中できるようなところもあったので、私が「勉強しなさい」と言ったことはありません。

娘は『競技かるた』に熱心に取り組んでいたため、桜蔭に入学してからしばらくはまったく塾にも行っていませんでした。でもやはり受験となると、学校の勉強とは違う部分が求められます。そんな時に、先にグノーブルに通っていた上の息子の勧めで、季節講習に行ってみようということになったんです。ところが、行ってみたらビックリするくらい素晴らしい授業で、「こんな世界があったんだ！」と、それはもう大変な衝撃だったようです。グノーブルに通い始めてからは、そんな様子がずっと続いていたので、親として特別なサポートや忠告をすることもなく、勉強のことは本人とグノーブルに任せっきりでした。

グノーブルで出会った先生方の印象は？

長谷川：塾は本人が通うところなので、親がここに行きなさいというのではなく、本人の意思で決めてもらいたいというのが私の方針でした。

グノーブルで最初に、強烈なインパクトを息子に与えていただいたのが、数学の纓田（おだ）先生でした。当初は、英語だけグノーブルでお世話になるつもりだったのですが、纓田先生の授業を受けて、「数学もやりたい！」と息子の方から言ったのです。纓田先生の授業はとても楽しくて、分かりやすくて、そして何より、先生ご自身のお人柄がとても魅力的だったようです。

それから、息子にとっては英語の中山先生は特別な存在でした。どんなことでも知っていらして、「いったいどれだけ勉強しているんだろう」と常々息子は感心していました。それにプラスして、いつでもお元気で、先生のエネルギッシュなパワーについては家でもよく話題になっていました。

あと、うちの子は国語が苦手でして…。でも初めは意地を張って「一人でやる」と言っていたんですが、いろんなところから聞こえてくる行村（ゆきむら）先生のお噂を聞いて授業を取ったら、そのお噂通り、教え方が分かりやすくて授業自体も楽しくて、「しっくりくる」ということで国語もお世話になりました。

グノーブルの先生方は、授業内容は素晴らしいのは当たり前として、やはりお人柄が素晴らしくていらっしゃるのだと思います。またそうしたことを子どもの様子

を通して感じられると、親は安心できるものです。息子も、先生方だけでなく、受付の方もふくめて、グノーブルは他とは違うとよく話していました。

大久保：娘が先生のことをとても尊敬しているというのは、私も娘の様子から感じていました。

私たちの時代なら、先生はとても偉い人で近寄りがたく、なかなか質問もできないような雰囲気があって、言われたことは何でもやって当たり前という感じでしたが、娘を見ていると、先生のことを尊敬しながらも親しみを感じていたようでした。塾の先生というより、人生の先輩と見ていたんじゃないでしょうか。楽しくて分かりやすい解説の背景に、先生方の造詣の深さを娘は見ていて、それを自分の目標にもしていたようです。

結局、うちの娘もグノーブルの環境が気に入っていたので、英数国をお世話になって、他にはどの塾にも通わず、あとは自分でやっていました。

長谷川：どの教科の先生もそうなんですが、「教え方が他とは違う」と息子が言っていました。すごく納得のいく教え方をしてくださると。

子どもって、深いところで納得できなければ、信用もしませんし、動こうともしませんよね。うちの場合は帰国生ということもあり、英語も感覚で身につけてしまい、それでは大学受験に通用しないことは本人も分かっていたんです。だからといって文法の理屈で教わっても「頭に入ってこない」と言っていました。ところがグノーブルでは、論理的にも、感覚的にも納得のいくような教え方をしてくださったのだと思います。息子はグノーブルの英語には本当に熱心に取り組んでいましたし、ここのご指導のおかげで、小学４年生で止まっていた英語が、東大受験では得点源だと自信が持てるまでに成長できたのだと思います。

受験生の親として塾や先生に求めるものは？

大久保：狭い受験勉強だけをしていては視野を広げることは難しいと思います。もちろん一番の目的は希望する大学に合格することですので、効果的な勉強をすることは大事ですが、それと共に、勉強への姿勢も育んでいただける環境が大切です。そこで学んだことは一生の財産になるはずです。

グノーブルの先生方は、あまり「受験だから」という言葉を使われないらしいんです。「受験だから覚えよう」とか「受験だからがんばろう」という発破のかけ方ですと、受験が終わったら「勉強はもういいや」という感じになってしまいがちです。でも、この年代の子どもたちには、今、吸収しておかなければならない大切なことがあると思います。それはきっと、知識を深めたり、考え方を身につけていくことの楽しさといったものじゃないかと思います。

「グノーブルの英語の教材を読んでいると、どんどん視野が広がっていろんな世界が見えてくるから楽しい」と、娘は言っていましたが、同時に、高度な英文を読みこなして理解するために、自分も成長したいと刺激を受けていたようです。こうした環境を提供してくださる塾はなかなかないと思います。

長谷川：グノーブルの環境は息子にもとてもあっていたようです。勉強はなかなか一人きりではがんばれないので、皆でがんばれる雰囲気が必要かと思います。それも、熱心な先生がお一人で生徒を引っ張ろうとされて、生徒たちがついていくという形ではなくて、生徒たちの一人ひとりが、「自分もがんばりたい！」と思えるような空気がないと、主体的な姿勢は身につかないのではないでしょうか。

当然、教室の中では先生が舵をとってくださるわけですが、その舵取りの仕方がお仕着せにならずに、子どもたちが自ずと勉強に向かえるような環境は大切です。グノーブルにはそれがあったのだと思います。子どもたちがその気になり、それを先生たちが上手に舵をとって導いてくださること。これは塾にとってとても大事なことではないかと思います。生徒をお客さんにしてはダメなんだと思います。

これから受験を迎える皆さんにアドバイスを

長谷川：息子の受験が終わって私が感じたことは、とにかく本人が自分からやる気になってがんばらないとダメだということです。大学受験は自分との戦いで、どれだけ目標をもってがんばれるかに尽きると思います。周りを見ていれば親として心配になったりやきもきすることがあると思いますが、どれだけ親が気をもんだところで、やっぱり本人がやる気にならないと進まないんだなと実感しました。親としては信じて見守るしかありません。それはすごく難しいことではありますが、結局のところそれしかないと思います。

私自身、実際にはいろいろ気になることもありましたし、言いたいこともたくさんありました。でも、そこで何かを言ったとしても、子どもには響かないだろうなと。ですので、親はある程度我慢をしながら待つことが大事なのではないでしょうか。

大久保：周りのお母さん方ともいろいろ話すことがありましたが、それぞれのご家庭で受験に向けた考え方や子どもとの接し方がありました。受験の時期というのは、ある意味、特殊な時期でもあると思うんです。かといって、今まで子どもと接してきたスタイルを突然変えるのは、本人にも余計なプレッシャーを与えることになると思います。ですから、我が家では、なるべく普段と変わりなく子どもと接するように心掛けていました。

もちろん、中には、子どもが毎日どんなことを勉強しているのかをすべて把握しているお母さんもいましたが、もし、普段からそうした親子関係であるなら、お子さんもさほど負担に感じることはないでしょう。うちの場合は違いました。受験期だからといって、よそのご家庭の様子を見て、今までのスタイルを突然変えてしまうようなことはしない方がいいと思います。

長谷川：本当にそうですね。うちはうちなんです。親と子の接し方はご家庭によってそれぞれ違うわけですものね。だから、その家なりのスタイルを貫くことが大事なんでしょうね。子どもにしても、「うちの親はこうなんだから」と思っているでしょうし（笑）。

「学ぶ力・学ぶ意欲」を育む

グノーブル代表
中山 伸幸（大学受験グノーブル 英語担当）

グノーブルの発足以来、「知の力を活かせる人に」というフレーズを塾名の脇に添えてきています。知の力を鍛えることで、生徒たちが目指す受験を乗り越え、さらにその力を伸ばしながら社会の中で活躍し続けてほしいとの願いを込めてのことでした。

グノレット10号では、私たちの考える「知の力」がどのようなものかを紹介させていただきました。今回は、「知の力」を育むために、私たち教える側が心掛けていること、教材や授業の独自の工夫、学ぶためのヒントなどをお伝えします。

若者が向かう未来

グノレット11号の表紙を飾ってくれた卒業生たちの写真は、私たちが目にできる最も美しいもののひとつではないでしょうか。グノーブルの卒業生たちだからとか、大切な教え子たちだからという次元のことではなく、この輝きには見る者を勇気づける力があふれていると思います。

彼らの笑顔が美しいのは、若いからこその瑞々しさに加え、努力をすることで自分たちを磨き、自らの力で未来への扉を開いた姿がここにあるからでしょう。その姿には、私たちは心からの拍手を送らずにはいられません。

彼らが、さらに学び、経験を積みながら、逞しい姿へと変貌を遂げていくことを、指導に関わったものとしても心から望んでいます。そして、次に続く生徒の皆さんが同じように輝けるよう、力を尽くしてお手伝いをさせていただくつもりです。

ただ、今の若い人たちが向かう将来は、必ずしも希望にあふれているとは言えないかもしれません。むしろ、難題をいくつも抱える大変な時代を生きていくことになりそうです。

希望が持てるニュースもあります。たとえば、東京オリンピックの開催が決まりました。2020年が近づくにつれてワクワク感は高まっていき、社会全体がある意味では高揚感に包まれていくでしょう。しかし、オリンピックは社会が抱えるいくつもの難題を解決できる性質のものではありません。私たちは未来に対して冷静に想像力を働かせ、さまざまな課題に向かっていく必要があります。

たとえば、国連が今年6月に発表した「世界人口展望」によれば、現在71億人の世界人口が、2025年には81億人、2050年には96億人になると予想されています。水や食糧の確保は急務ですし、エネルギー需要は高まり、地球環境への負荷は増加の一途をたどることが危惧されます。当然、資源の争奪が激化していくことも懸念されます。

また、9月末には、IPCC（国連の気候変動に関する政府間パネル）が6年ぶりに報告書を発表しましたが、「今世紀末、気温は最大で4.8度、海面は最大で82センチ上昇する」と、地球規模で環境が激変する可能性が指摘されています。

数々の崩壊した社会、崩壊をくいとめてきた社会の検証を踏まえて、その著書の中で現状に警鐘を鳴らす著名な学者*1もいます。人口増、地球温暖化、自然破壊、化石燃料の枯渇など、人類が対策に失敗すれば、現代文明全体が数十年の内に崩壊へと進む要因を世界が抱えていることは、著者の指摘を待たずとも私たちはうすうす感じています。しかし、「今の若い世代の人たちが生きているあいだに重篤な状態に陥るだろう」という著者の言葉には、生徒たちや我が子の未来を考え、はっとせざるをえません。

国内に目を向けた場合には、人口の減少傾向と急激な高齢化は深刻です。英『エコノミスト』誌*2は、日本がこれから直面する高齢社会を、世界史上未踏のものとしています。2010年時点での世界全体の中位数年齢（人口を年齢順に並べたとき、まん中に位置する人の年齢）は29歳で、2050年には38歳に上昇するとされていますが、その時点での日本の予想中位数年齢は52.3歳です。このままでは、増加する高齢人口を、若い労働人口が支えていくというモデルでは国の運営は難しいかもしれません。

少子高齢化は、経済成長率や国際競争力にも大きく影響します。日本経済団体連合会のシミュレーション*3によれば、現在世界3位のGDP（国内総生産）は、2050年には9位にまで落ち込む可能性があり、世界のトップグループからは転落し、存在感が大きく低下することもありえるとしています。激変していく国際政治、国際経済の勢力図の中で、日本はどのような国を志向して実現していくことになるのでしょうか。

*1　ジャレド・ダイアモンド「文明崩壊（上・下）」草思社 原書2005年刊
*2　「2050年の世界 英『エコノミスト』誌は予測する」2012年8月刊
*3　21世紀政策研究所2012年4月

ライフラインとしての教育

未来に対するマイナス要因としては、他にも、化学物質汚染の蔓延、新しい戦争とも言われるテロリズム、1000兆円を超える国が抱える借金のことなど、案じられることがいくつも浮かびます。しかし、人はこれまでも、さまざまな危機（貧困、病、経済恐慌、熱い戦争、冷たい戦争など）に対処してきているのですから、今の先行きが特に暗いとは言えないのかもしれません。大切なことは、大人である私たちが、持続可能な世界に向けて、すべきことを実践していくと同時に、次代を担う若者に伝えるべきことを、しっかり伝えていく努力をすることだと思います。

私たちグノーブルにとって大切な仕事は受験指導です。しかし、手段を選ばず結果だけを求めることがあってはならないと自戒しています。右肩上がりの成長が保証されている安定した社会であれば、社会の勢いが私たちをより良い方向に連れていってくれますから、その社会の中で立派だとされる学歴や資格をいったん手にすれば、それは、生活の安泰を永続的に獲得することを意味します。その場合、生徒たちを一流大学に合格させれば大人の責任を果たせたとも言えるでしょう。一流大学合格という結果だけ伴えば、詰め込み式であれ、テクニック偏重であれ、指導法において責任が問われることはないかもしれません。

しかし、今は、景気の良い社会が、所属する者をより幸せへと自動的に運んでくれる時代ではありません。一人ひとりが成長していく力を蓄えていることが必要な時代です。有名大学に合格はしたもののそれが人生のピークだった、という生徒を送り出したのでは無責任のそしりを免れません。

グローバル化の波の中で起こる激変に対処し、常に課題と向き合っていくことになる生徒たちにとって、何より大事なことは、「学ぶ力・学ぶ意欲」を具えていることだと思います。私たち人間は、学ぶことで新たな力を獲得し成長できます。新しいものの見方や技量を学べれば、柔軟な対応力を身につけ、難題を乗り越える智恵を生み出す可能性が生まれます。

中学受験や大学受験に向けての勉強も、生徒たちを、より良き学び手へと導くものでなくてはいけないと思います。「学ぶ力・学ぶ意欲」を軸に据えた教育は、現代社会においてはライフラインのひとつと言えるのではないでしょうか。

考える力とつながる力

食事が身体をつくるように、学ぶことが人をつくります。生徒たちの、学ぶことができる能力と、学びたいと思える気持ちを育むことは、大人である私たちがすべき重大事だと思います。英語に、“If you aren’t growing, you’re dying.”「もし成長していないのなら、死に向かっている」という表現があります。学べなければ成長はできないのですから、良き学び手へと子供たちを導かないのであれば、それは彼らの未来を奪い取っているようなものです。

社会を導く者に求められる能力も、社会の一員として貢献する者に求められる能力も、学べばこそ得られるものです。そして、その学ぶ力の根底にあるのは、広い意味での言語力だという言い方もできると思います。

言語には、「理解・思考・コミュニケーションの道具」としての働きがあります。目の前にいる人の話を理解することはもちろん、古今東西あらゆる人たちの考えを理解するためにも言語力が必要です。また、自分の考えを

論理的に組み立てていく作業にも言語は欠かせません。さらに、人とつながるためには言葉が必要です。要するに、「考える力」と「つながる力」の基盤が言語と言えますが、母語としての日本語に加え、世界の人とつながる英語、さらには、数学も広い意味での言語です。

母語の力が大切なのは論を待ちません。それに加えて、広く世界から知識を得て、世界の人々とコミュニケーションをとっていくためには、英語は必須です。数学もまた、「理解・思考・コミュニケーションの道具」です。自然現象の理解に限らず、社会現象を把握するためにも数学力の大切さは増していますし、数学的論理思考や、数学的発想が役立つ局面は多々あります。

生徒たちの主体的な気持ち

教育は「教え育む」と書き、指導は「指し導く」と書きます。どちらの言葉も、教える側中心の表現になっているようですが、もし、教える側が一方的に指図して、引っ張っていくだけであれば、効果はあまり期待できないでしょう。授業に参加する生徒の皆さんが、主体的で前向きな気持ちになれるときにこそ、相互作用が生まれ、授業は活気あるものになり、教室は大きな成果を育む環境になっていきます。

グノーブル発足時から、私たち教える側は「２つの磁石」になることを最優先の努力目標にしました。

一つは知的な引力を持つマグネットです。「この先生についていきたい！」、「授業が楽しい！」、「信頼できる！」と皆さんが思えるときこそ、勉強は面白くなりますし、充足感が味わえるはずです。課題にも意欲的に取り組もうという気持ちになれます。

同じ教室という物理空間であっても、そこにどんな先生が登場するか、どんな教材が用意されて、どんな授業が展開されていくかによって、そこの空気は大きく変化します。何回も時計を見ては「まだ○分しか経っていない」と、ためいきをつくことにもなるでしょうし、夢中になっているうちにあっという間に授業が終わることにもなるでしょう。このような体感時間のことを、ユング心理学ではカイロス時間と言って、物理的に計測できるクロノス時間とは区別するそうです。クロノス時間を忘れてしまう磁場が働く授業が実現できれば、皆さんの頭は活性化されて理解も深まり、授業後には元気な気持ちにすらなれるはずです。

もう一つの磁石は正しい方向を示すコンパスです。目指す大学に合格し、その大学で活躍できるように、ナビゲーター役を私たちは果たします。皆さんは、安心して、そして思う存分、「頭」と「心」を使ってください。また、コンパス(compass)という英語の語源は、com(＝共に)、

pass(＝歩く)です。私たちは、担当する皆さん一人ひとりをしっかり見つめながら、共に歩いていくつもりです。

名前を覚えることは基本

卒業生たちの『合格者の声』には、「名前をすぐに覚えてもらえて嬉しかった」といったコメントがたくさんあり、そう書いていただくと私たちこそ嬉しくなります。ある卒業生*4は「グノは先生と生徒の距離がすごい近い！初授業当日からそのクラス担当の先生が、自分の名前を知っていてびっくりしました(笑)。先生が生徒一人ひとりの学習の進捗状況を熟知していて、学習相談にスムーズに乗っていただけました」と書いてくれました。

私たちグノーブルで教える側からすると、名前を知らない生徒が教室の中に座っている状態では、授業がやりにくいという気持ちになります。ですから、担当する皆さん全員の名前をできるだけ早く覚えようとしています。

私たちは、解説をしながら皆さんのことを見させていただいています。目の前の皆さんにしっかり伝わっているかどうか、難しすぎないか、興味が持てるように話せているかなどを感じ取るようにしています。そのためにも皆さんのことをよく知る必要があります。そして、その第一歩が皆さんの名前を覚えることなのです。

私の場合、最初の授業では、こっそり座席表をつけ、かなり無理に名前を覚え込もうとします。一番前にいるメガネをかけている人は○○さんで、その後ろに座っているこの髪型は○○君などという具合です。

その授業の初めのうちに全員を覚えてしまいますが、次の授業になると、私の場合、どうしても名前と顔が一致しない方が出てきてしまいます。グノーブルでは座席が決まっているわけではありませんから、前回つけた座席表は使えません。でも、奥の手があります。たいていの授業では、最初に皆さんに添削用プリントを演習してもらいますから、教室を回って、プリントに書かれている名前を確認させていただいています。

しかし、3回目、4回目といっしょに授業をやっていると、名前と顔が一致するのはもちろん、添削プリントの答案の内容や文字の特徴、授業を受けているときの仕草、授業中のやり取り、授業外での質問受けや雑談を通して、いろんな印象が蓄積されていきます。メガネがコンタクトに変わっても、運動会の後で長髪が坊主頭に変わっても、もう平気です。

職員室や自宅で教材を用意するとき、解説の準備をするときにも、いつも皆さんのことを思い浮かべています。皆さんが夢中になれそうな題材、理解が深まる解説、楽しんでいただけそうな話、きっと頭を悩ませることになる難問など、学習効果を考えて準備をしているときの私たちの頭の中には、いつも皆さんがいます。

要するに、私たちは、有名大学に何人合格したという匿名性の高い情報よりも、皆さん一人ひとりといっしょに勉強を進めていくことの方に、はるかに高い関心を持っているということです。

今年の『合格者の声』に、「基礎を作ってくれたのも、実力を伸ばしてくれたのもGnobleの先生方です。どの先生も生徒一人ひとりのことを理解してくれているので、質問もしやすく、分かるまで何度でも教えてくれ、本当に助かりました。僕が受かったのはGnobleの先生方の丁寧な指導のおかげです!!」とコメントを残してくれた卒業生*5もいました。

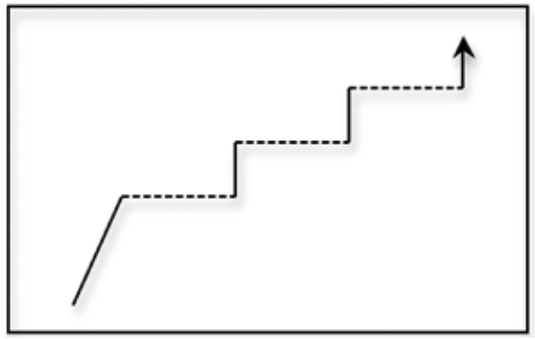
これからも、「人と人とが出会うときには、まず相手の名前を覚えることが基本」という姿勢を、ごく普通のこととして守っていきたいと思っています。

*4 I.K.くん 一橋大経済学部1年 都立日比谷出身(7期生合格者の声 74ページ)
*5 Y.K.くん 東大理科一類1年 麻布出身(7期生合格者の声 37ページ)

コーチの出番

今まで見えていなかったものが見えるようになり、できなかったことができるようになる。こうしたことが勉強の効果のひとつです。学ぶことで成長でき、やれることが増すのですから、勉強には喜びが伴います。また、「脳は筋肉に似ていて、うまく使っていると気分がいい。理解すれば絶頂感が得られる」と書いた天文学者*6もいました。

しかし、勉強が楽しいというよりも、勉強は苦痛という表現の方がしっくりくる人が多いかもしれません。そ



の場合、先輩*7が残してくれたこんな言葉がヒントになりそうです。

「僕は勉強に関しては、始めの試行錯誤というか基礎的な部分を積み上げているところは全然楽しいと思わないんですけど、その段階を抜けて、どんどん自分がレベルアップしているのが分かるような、いろいろ取り込めるような力がついた後は全部楽しく感じるように……」

つまり、基礎を学んでいる間は面白みが分からず、そこを抜けるまでがんばれば、その先からは楽しくなるということです。

下の図をご覧ください。左下からスタートを切り、右上に向かって勉強を進めながら実力をつけていくとお考えください。最初の斜面が基礎の積み上げです。その科目(分野)が、たまたま自分の好みに合っていると、この斜面を登るのは楽です。また、これまでの経験で土台がある程度できている場合には、あっという間に斜面を駆け上がることもできます。

ところが、科目(分野)によっては、基礎段階をクリアするのにかなりの時間と努力を要します。斜面を登る気にもなれなかったり、途中で諦めて投げ出したくなったりすることもあるでしょう。そういうときこそ、コーチ役である私たち教える側の出番です。導入部分の解説に工夫をしたり、練習問題選びに気を遣ったりもします。さまざまなやり方、たとえば、皆さんが問題を解いているところを見て回る、ノートを集めてチェックする、答案を回収して添削する、授業内でのやりとりで確認する、といった方法を通して、基礎段階の斜面を登り切るのを手伝っていきます。

基礎の土台を積んでしまえば、ある高みに上れるのですから、皆さんの側でも、私たちを大いに利用しながらがんばって斜面を上ってください。どんなにつまらないと思える質問もどんどん投げかけてください。遠慮は無用です。質問受けに少しの手間がかかるのは事実です。しかし、皆さんが基礎段階をクリアしていく姿を見ることの喜びに比べれば、そんなことは本当に取るに足らないことなのです。それに、質問を受けることは、私たち自身にとってのプラスになります。皆さんの躓きやすい点がよく分かり、授業での解説を改善するヒントもいただけることになりますから。

*6 Carl Sagan "Broca's Brain" Random House 1979年4月
原文はIn this respect the brain is like a muscle. When we think well, we feel good. Understanding is a kind of ecstasy.
*7 松田洋樹くん 東大理科二類2年 筑駒出身
(GnoTube www.gnoble.com/gt/→ ◆卒業生が語るグノーブル → 037の2' 05" 以降)

基礎学力の大切さ

基礎学力に関しては、大学受験グノーブルを発足してすぐに気づいたことがありました。グノーブルへの入室相談の際や、季節講習で初めて出会った生徒さんの中に、

基礎学力が大きく抜け落ちている方が少なくないということです。場合によっては、基本的な勉強の習慣をなくしてしまってもいました。ほとんどの方が、狭き門をくぐり抜けて有名中学や高校に通っている生徒たちです。もともと勉強嫌いなわけでも理解力が低いわけでもありません。その生徒たちが、どうしてこれほどに基礎学力が抜け落ちているのかと、悲しい気持ちにさえなります。これまでの勉強において、自主性に任されすぎてきたのかもしれません。

また、問題演習の量を重視する環境で勉強してきたのでしょうか。勉強が作業になっていて、深く考えることを楽しめない生徒たちもいます。結果として、根本の理解(基礎)が欠けているために応用が利きません。

基礎的な知識・考え方・技能を若い人に伝えていくのは、大人たちの責務だと思います。脆弱な地盤には高い建物を建てることはできないからです。また、知識を詰め込んでいても、丸暗記で得たものは土台になり難いので、伝え方にも配慮する必要があります。

ニュートンがある手紙の中で書いた、「もし私が他の人より遠くを見ているとしたら、それは巨人の肩の上に立っているからだ」という言葉をここで引くのは少し大げさかもしれません。しかし、土台があるからこそ、その上への積み上げができるという点は、あらゆる勉強に通じる真理なのではないでしょうか。

グノーブルでは、数年前からEGGS*8という基礎講座を開講しています。時期により開講学年は異なりますが、英語の基礎が抜けてしまった中３～高２生の方を対象にしています。「グノーブルの先生の手にかかれば英文法の解説はこんなにワクワクできて楽しい！それを実感しながら、英語の基礎を固めてください」と謳い、入室テストの基準点に達することができなかった方たちを中心に受講していただき、効果を上げてきています。

*8 English Grammar Green Session for newcomers
egg：「卵」→「成長の始まり」「無限の可能性」
green：「草(grass)の成長(grow)」が原義→「青々と実る」

停滞は躍進の準備

９ページの図をあらためてご覧ください。左下から斜面を登り切ると平坦な点線部分に出ます。登った直後には少しホッとできます。それなりの爽快感も味わえます。実際に力がついていますから、ある程度の問題なら解けるようになったという実感もあります。

もし、その科目(分野)との相性が良く、この段階で好きな科目(分野)だと思えていれば、この先の道のりは結構順調でしょう。好きなことをやっているのであれば、それ自体が楽しいのですから、難しい局面に立ち向かうことも、量をこなすことも苦痛ではありません。

しかし、普通は、この先にも試練が待ち受けます。点線部分は、上り坂ではありませんから、上がっている(実力が伸びている)とは実感できません。そんなときにはさまざまな思いが湧くものです。たとえば、このやり方でいいのかと勉強法に疑問が湧く、自分にはこの科目(分野)は向いていないと疑念を抱く、勉強を続ける意味がないとか、才能がないのにがんばっても仕方がないと思える、などです。

そういうときに役立つ一つが、大きな夢を持つことです。その夢の実現のためなら今の辛さを我慢して乗り越えようと踏ん張りがききます。

そして、もう一つの役立つ存在が、やはり、信頼できるコーチです。コーチが自分のことをしっかり見てくれて、的確なアドバイスをしてくれると思えれば、安心できますし力が湧きます。

引用が少し長くなりますが、長い停滞期を乗り越えた先輩*9の声を紹介します。

「私は模試の成績(英語)は悪く、グノでも全くできる方ではありませんでした。周りの友人も、グノで一緒に授業を受けていた人たちもみなレベルが高く、挫けそうになることが何度もありました。後輩のみなさんの中にも、私のような人がいるかもしれません。成績がなかなか伸びないのは確かに精神的に辛いものですが、そんなことに負けてはいけません。やると決めたからには、後戻りしてはいけないと思います。最後の最後まで、信頼できる先生のおっしゃる勉強法に従い、自分でも工夫しながら少しでも現状を改善しようと思うことが大切です。私は英語がなかなか伸びず、本当に辛かったのですが、先生のおっしゃるように音読だけは1年間欠かさず行っていました。するとセンター試験後、過去問がすらすら読めるようになっていたのです。グノに通っている多くの人が早くから音読の効果を感じるのに反して、私がこれを感じたのは直前期でした。それでも、直前に英語に自信が持てるようになったのは受験の上でとても重要なことだったと思います。最後まで諦めなければきっと大丈夫！グノと自分自身を信じてがんばってください」

ものごとが上達していくときに、直線的に右肩上がりで進むのであれば、毎日楽しくて仕方がないでしょう。昨日より今日、今日より明日と実力の向上を実感できるのですから、その気持ち自体に励まされます。ところが、実際には停滞の時期が必ず来ます。

しかし、この時期は次の段階にジャンプするための力を蓄えている時期でもあるのです。停滞期に踏ん張ってがんばれば、そして、やり方さえ正しければ、いつか躍進のときを迎えます。それまで苦労してもできなかったことが、まるで嘘のように楽々とできるようにもなります。

しかし、それがしばらく続くと、また、停滞している自分に気づきます。ものごとの進歩はどうやら、この停滞と躍進の繰り返しの過程を経るもののようです。

でも、経験を積むといいことがあります。停滞期になり問題が解けなくて頭がジリジリするときにも、辛い気持ちは変わらないのですが、このジリジリする感覚が楽しいとも感じられるようになります。この先に躍進のときを迎えられるはずだと、経験上分かるからでしょう。

*9 Y.T.さん 東大文科一類1年 桜蔭出身(7期生合格者の声 61ページ)

「やるのは自分」との覚悟

基礎段階の斜面を登り、停滞と躍進を繰り返していくという各段階は、生徒の皆さんが自分の力でクリアしていくことになります。ですから、「自分の足で歩く」と覚悟を決めないと、上のステージに上がっていくことは難しいでしょう。「授業に参加していれば教えてもらえる」という受け身の姿勢のままでは上達は期待できません。

「学ぶのは自分」という主体的な意識が持てるかどうかには、環境が大きく影響しますが、その環境を作っていくためのひとつとして、私たちは、生徒の皆さんと頻繁にやりとりをしています。皆さんをどんどん指名して答えていただいている、ということです。

授業中に当てられることが嬉しいという生徒は多くないと思いますが、ある卒業生*10が面白い発言をしてくれました。「当てられるのはいいことなんですけど、やっぱり初めて当てられたときは、体が飛び上がるくらいビクッとしました(笑)。でも、こっちもだんだん成長して、徐々に当てられるのが楽しみになってくるんです。最後の方は記号問題しか当てられないと残念に思えて(笑)」

授業中に指名して答えてもらうことの効果は、当事者だけには留まりません。教室にいる全員が、当てられた生徒の答えやその答え方、それに対しての私たちの言葉や言い方から、いろいろなことを感じ取っていると思います。ときに、当てられた生徒が見事な答え方をすると、「すごい！」と感動を呼び起こします。(私たち教える側も感動します。)

このような、やりとりの積み重ねが、皆さん自身の主体的な気持ちを育んでいくものです。いつのまにか前向きに勉強をする習慣にもつながると思います。

卒業生は口をそろえて「グノーブルは先生と生徒の距離が近い」と言ってくれます。それは、生徒たちの主体的な参加と、私たち教える側の情熱とが一体となって授業を作っているからかもしれません。

今年も、ある卒業生*11が「グノーブルの生徒は意識が高く熱心だったため、刺激を受けることが多かったです。また、先生方が授業中にたくさん名前で当ててくださるので、答えられるようにがんばろう!! という気持ちになりました」と書いてくれました。

別の卒業生*12は、「グノは、常に程よい緊張感を保ち続けられ、先生と生徒の距離がとても近い、素晴らしい塾です。(中略)疲れてても、テスト中でも、グノは行かなきゃと思っていました。勧めてくれた親に感謝です」というコメントを残してくれました。

これからも皆さんの熱意に負けないよう、学ぶ側と教える側の程よい緊張感を保っていくべくつとめていきます。

*10 坂上遼くん 東大理科一類1年 駒東出身(グノレットvol.11 16ページ)
*11 Y.H.さん 慶應大法学部法律学科1年 お茶の水女子大附属出身(7期生合格者の声 107ページ)
*12 G.H.さん 上智大外国語学部英語学科1年 東洋英和出身(7期生合格者の声 116ページ)

脳が活性化する環境作り

教材は料理に似ていると私たちは考えています。ですから、美味しさと栄養を十分に考慮して準備するようにつとめています。教材の開発は授業担当者が直接関与して行っています。そうでなければ、俯瞰的な視点と一人ひとりを見る視点の、両方を具えることができないからです。

俯瞰的な目とは、先々のことまで考慮したり、他の項目との関連を考えたりする目のことです。栄養効果の高い教材作りにはこの視点は欠かせません。しかし、目の前にいる生徒のことが分かっていなければ、その生徒が美味しいと感じる料理を準備することは難しくなります。サプライズ効果の演出も困難です。皆さんが、「あ、そうか！」「お、なるほど！」「わ、できた！」などと、小さくてもアハ体験*13を実感できる教材を準備するには皆さんのことがよく見えている必要があるのです。

また、教材には新鮮さが重要です。たとえば、リアルタイムで起こっている事柄を扱った英文は、それだけでも生徒たちの興味を強く惹きます。しかし、新しいものばかりを重視しているわけではありません。何年前のものでも色褪せないものはあります。古くても大切なものは料理の仕方で新鮮な状態で提供できます。

それから、グノーブルのテキストの多くが薄い小冊子になっていて、毎週もしくはターム毎に配布されるのも、新鮮さを重んじてのことです。新しいテキストがもらえれば、今回はどんな内容なのかと期待が持てます。短い期間で終えられれば、取っつきやすく、達成感が味わえ

るという効果もあります。
　各クラスの事情に合わせたプリント教材も毎週用意されます。プリント形式であれば小回りが利きますから、痒いところに手が届きやすく、個別の対応も可能になるからです。

　教室の中を、先生があちこち動き回るのも、グノーブルではよく見られる風景です。皆さんの考え方の道筋、答案の書き方や仕上がり具合を、素早く見ながら声をかけていきます。生徒の皆さんが自分では気づきにくいポイントを個別に伝えられる分、学習効果の向上が期待できます。それと同時に皆さんのモチベーションも上がると思います。寝ていようが他事を考えていようが、放っておかれる環境と、教える側が皆さんの考え方や解き方に大いに関心を持っている環境と、どちらが意欲につながりやすいかは言うまでもないと思います。

　新しい単元の導入時などには、黒板での展開を重視しています。皆さんの視線は黒板に注がれます。私たち教える側は、皆さんの目を見て、理解度や関心の度合を考慮しながら説明していきます。慣れない先生が生半可な理解で説明すると結果が悲惨になるのは言うまでもありませんが、黒板での展開をうまく使うと、魔法のような効果が生まれ、生徒たちの理解の速さにも、深さにも明らかな違いが出ます。これには、ミラーニューロンが関与していると思われます。
　ミラーニューロンは、1996年にイタリアの神経生理学者ジャコーモ・リッツォラッティらによって発見された神経細胞です。他人の動作を見ているときに、その動作を自分で行っているかのように反応するところから、“鏡の神経細胞”と名づけられたそうです。
　アメリカの神経科学者のV. S. ラマチャンドランは、「道具や火の使用」、「言語の習得」、「相手の気持ちを推し量る力」などはミラーニューロンに依っており、人類が高度な文明を急速に築けたのは、人のミラーニューロンが発達しているからだと主張しています。TED[*14]の「文明を形成したニューロン」をご覧いただけば、彼の主張がよく分かります。
　先生が黒板で解説していく姿を見るときだけでなく、皆さんが周りにいる優秀な生徒の様子を感じているときにもミラーニューロンが働くはずです。この「共感」によって、集中して深く考える習慣が強化され、他の人の考え方に刺激を受け、今までとは異なる物の見方を身につけられます。良い環境に身を置けば、お互いに刺激し合いながら、学びの質を高められるのです。

*13「あっ!」という不思議なひらめきを感じながら理解に至る体験のこと。
　英語ではthe Eureka effect、the aha! effectとも言われます。
*14 アメリカで始まったプレゼンテーションのイベント。さまざまな分野における
　最前線のプレゼンテーション動画を世界に無料配信しています。

グノーブル独自の授業形式

　授業形式自体にも、グノーブルには大きな特徴があります。
　授業開始直後の教室は、多くの場合、静まり返っています。生徒の皆さんが真剣に演習に取り組んでいるからです。
　皆さんの答案は、授業を担当する私たち自身がその場で添削してすぐに返却します。直後には解説を始めます。皆さんの疑問に思ったことにすぐにお応えするためでもあり、添削をして私たちが気づいたことを、熱いうちにお伝えしたいからです。
　よく、グノーブルの授業がスピーディだと言われますが、それが実現できる理由は、一つには、私たちが解説するときに無駄をなくせるからです。授業でのやりとりや、頻繁な添削を通して皆さんのことを見させていただいていますから、痒いところに手が届く、無駄を省いた解説が実現できるということです。そして、もう一つには、解いたばかりの問題に皆さんの意識が集中しているからだと思います。
　グノーブル独自の授業形式に関しては、卒業生たちも多くのコメントを寄せてくれています。高３生になるときにグノーブルに通い始めた卒業生[*15]は、「グノは普通の塾とは授業スタイルが違います。普通だと、家で予習して塾ではその解説だと思うんですけど、グノでは最初にプリントを渡されて演習して、提出した答案はすぐに添削してもらえて、新鮮なうちに解説も受けられるというのが、本当に驚きでした」と発言してくれました。
　もし、先生の説明を受身の姿勢で聞きながらノートをとることが授業の中心であれば、長く集中し続けることは難しいでしょう。しかし、すぐに添削対象となる演習課題にクラス全員が取り組むとしたら、そこには自分の力試し＋競争の要素が加わりますから、前向きな気持ちが働きます。しかも、解説時には、私たちが皆さんを当てますから、皆さんの側では問題演習時によく考えておく必要も生じます。真剣に問題演習をしていれば、疑問点もいろいろ出てきます。その疑問が直後の解説で解消されるので、解説を聞くときにも前向きになれます。
　「授業中に演習した問題をすぐに解説する、という形式は、集中力を高めるので長時間の授業も全く苦ではなく、あっという間でした。先生に当てられる緊張感もあって、負けず嫌いの僕にはうってつけでした」と、別の卒業生[*16]はコメントを残してくれましたが、授業時間の長さもグノーブルの特徴です。中学や高校の50分よりも、大学の90分よりも長く、120分連続です。集中力と持続力をグノーブルの授業でぜひ養ってください。
　この集中力と持続力を養えば、その力が、将来の人生の中でも間違いなく大きな役割を果たすことになるはずです。新しいものを生み出すにも、大きなことを成し遂げるのにも、これらの力が鍵になるからです。

*15 西村智之一くん 東大理科一類1年 駒東出身(グノレットvol.11 16ページ)
*16 I.R.くん 東大文科一類1年 駒東出身(7期生合格者の声 39ページ)

添削

授業内添削以外にも頻繁に添削を行うのがグノーブルの特長です。添削が、皆さん一人ひとりとつながり、皆さんの成長を個別に支援する効果的な手段だからです。
ときには添削のやりとりが、生徒と私たちの交換ノート的な役を果たすこともあります。課題とは直接関わりのない質問や相談がそこに書かれていることがあり、その場合には、コメントを残したり、授業後に声を掛けたりして対応させていただいています。
出来の良かったプリントや、私たちが良いコメントを書かせていただいた場合には、そのプリントが受験の「お守り」代わりになることもあるようです。

教える側にとっても、添削は、次の授業や教材開発へのヒントがたくさん得られる貴重な存在です。
また、同じ生徒の答案を、数ヶ月、場合によっては、それ以上の期間にわたって見させていただくと、ときには急な成長を感じたり、確かな成長が見えたりすることもあります。こうしたことは、私たちにとっては何よりの喜びです。

生徒たちの答案をその場で添削

「集中の度合」×「時間」＝「努力量」

集中力と持続力は、努力量に直結すると考えることもできます。そして、努力を積み重ねることは夢の実現に近づくことです。
努力ができるという習慣は一生の財産になります。もちろん、努力をすればどんなことでも可能になるとまでは言えませんが、努力できなければ成果を上げることはできません。

何かに没頭(＝集中)すると、時が経つのも忘れ、非常に効率の上がる経験ができます。それを起こすには、「自分の決めたことだからやる」、「30分は絶対に集中」などと決めて意識的に鍛えていくことも有効です。
集中力と持続力において尊敬できる人を周りに見つけて、その人をお手本にするのも役立ちます。

勇気が宝になる

　集中力と持続力に加え、良き学び手には勇気も必要です。失敗するのは怖いものですから、これは無理だと自分からリミッターをかけてしまうこともあります。先々の苦労を考えて、やる前から気が滅入ることもあります。最初の一歩を踏み出すには、それなりの勇気を振り絞る必要があるのです。
　生徒たちが、挑戦する勇気を振り絞るには、周りの大人の姿勢も大切だと思います。自分の親が勇気を持って挑戦している背中を見ていれば、本人も勇敢になれるかもしれません。いざとなれば自分を守ってくれる家があると思えれば、思い切って挑戦してみようと思いやすくなるかもしれません。

　グノーブルとしては、皆さんにまなざしを向け、成長を信頼して待つことが大切だと心掛けています。その意味では、卒業生[*17]の次の発言には、私たちの方こそ、しっかり感じ取っていただいていたことに感謝したいと思います。「私は３人の先生に教えていただいていましたが、共通して思っていた印象は、『いいお父さんみたいだな』ということです。私たちの成長を温かく見守ってくださるので、こちらも信頼して授業を受けられました。できなかったからといって見放すわけでもなく、全員平等に優しく見守ってくださったことに感謝していました。もちろん厳しいときもありましたが、その裏には愛情を感じることができました」

　とにかく、新しい領域に足を踏み入れ、慣れないことに挑戦するのは怖いものです。しかし、その怖さを乗り越えてやってみるときに、より大きな自分に変われるチャンスが訪れます。「経験が人を鍛える」というのは真理だと思います。

　このことに関して、英語には面白い言葉のつながりがあります。experiment「試みる、実験する」の語根はperi「試み」です。perilという語は「危険」という意味ですが、試みには危険が伴うからです。勇気を持って試みると、成功したり、ときには失敗したりというexperience「経験、体験」が得られます。経験豊かな人がexpert「達人、専門家」で、その達人が具えているのがexpertise「専門的知識、専門的技術」です。

　受験を突破して得られる一番のexpertise「専門的知識、専門的技術」は、ひょっとすると、自分のことが今まで以上に分かる、ということかもしれません。自分にとっての効率のいい覚え方、効果的なノートの取り方、エンジンの掛け方、気分の切り換え方、プレッシャーへの対処法、どこまで無理がきくのか、どんな誘惑に弱い

か強いか、などなど。そして、何より自信を手にできます。こうしたものは、懸命にがんばった人にだけ得られる宝です。進学後にさらに成長していくための貴重な宝です。お金で買える宝石とは違う、泥棒には盗むことができない確かな宝物です。

*17 木下茜さん 千葉大医学部1年 学芸大附属出身(グノレットvol.11 35ページ)

「楽しい」とはどういうことか

今年の『合格者の声』の最後のページ、最後の行は、「Gnobleは、勉強がとにかく楽しくなる塾です！」というコメント*18です。それ以外のページを繰ってみると、「楽しい」という言葉は、ほぼ全てのページに登場していることにも気づきました。

多くの卒業生たちが感じてくれた楽しさは、お客さまとして座っている楽しさとはかなり違うと思います。むしろ、お客さまとして座っていないから、能動的に参加できる仕組みがあって、頭をフルに使える環境があったから、楽しかったのではないでしょうか。

また、実力と課題との関係も大切です。やさしすぎたのでは退屈で、難しすぎたのでは楽しめません。

緊張と緩和の要素も必要です。始めから解説を受けるのではなく、頭を悩ませた後に、本当に腑に落ちる思いが持てると理解は深まります。

期待が持てる、展開に意外性があるなど、他にも楽しさを演出する要素はいくつもあるかもしれませんが、意欲の喚起は特に大切な要素でしょう。授業の場以外の努力ができることが成長につながります。その際に、たとえば、GSL*19のような明快な方法論が提示されていると、やってみようという気持ちにつながりやすくなります。

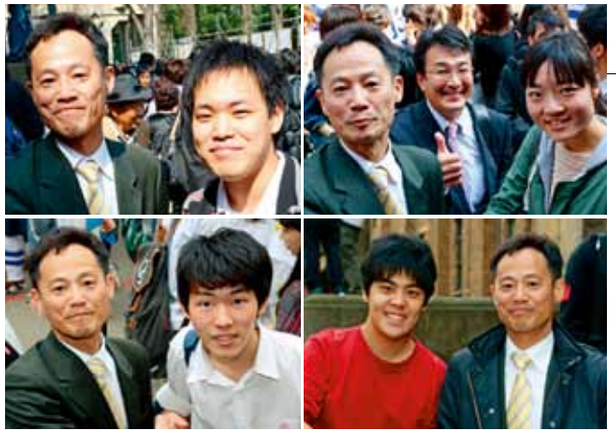
「グノの(英文)プリントは本当に読んでいて楽しいんです。勉強に飽きたら『音読しよう』という感じで、私の場合、音読自体はもう勉強という感じではありませんでした。『あ、これ好きな内容だ』と思えるプリントがたくさんあって、読んでいるときはノリノリなんです」*20

*18 Y.S.さん 早大政治経済学部1年 浦和明の星女子出身(7期生合格者の声 146ページ)
*19 Gnoble Sound Laboratory：6学年すべてに用意された英語の音声教材。音読やシャドーイングなどの合理的練習法(ワークアウト)も確立されています。
*20 大久保彩さん 東大文科二類1年 桜蔭出身(グノレットvol.11 5ページ)

「信頼」と「敬意」と「ユーモア」

私たちは、生徒と先生、それから職員同士が、お互いに「信頼」と「敬意」と「ユーモア」でつながっている塾、組織を理想と考えています。

相手を信頼しようとする心掛けは、年下の人たちを指導する私たちにはとても大切です。経験不足だからできないだけなのに、私たち教える側が短気になってしまったのでは、皆さんの成長の芽を摘み取ってしまいます。皆さんの成長を信頼して待つこと、そして同時に、皆さんから信頼されるに値するように、私たち自身が努力していくことを大事にしたいと考えています。



東大合格発表会場にて

互いに敬意を持って接する雰囲気も大切です。人を蹴落とす競争よりも、相手を見習い、自分を高める意欲の方が、長期的には前向きな努力が持続し、成果が得られたときに心も晴れ晴れします。

ユーモアは、人と人との潤滑油ですし、心の余裕につながります。でも、ここでちょっと気をつけたいことがあります。「笑いの中には、人を蔑む笑いがある」ということです。たとえば、多くの人にできることを、ある人ができないとき、その人のことを笑いの対象にしてしまうことがあるかもしれません。人とは違っているという、ただそれだけで笑うこともあるかもしれません。確かに、世の中にはこんな笑いが少なくない気がしますし、知らず知らずのうちに自分もそうしてしまいそうになることがあります。

私が理想にしている笑いのお手本は、たとえば次のような、人を勇気づける笑いです。

第二次大戦の頃、頻繁に空爆にあっていたロンドンで、ある日、有名なデパートの入り口が大破してしまったそうです。これ以上営業を続けるのは危険な状況下でも、そのデパートは翌日も店を開け、入り口にはこんな看板を出したというのです。

「平常通り営業。本日より入り口拡張！」

この負けず嫌いのユーモアは、きっと多くのロンドンの人を勇気づけ、励ましたと思います。

今の世の中は、いかに人を出し抜き、いかに人をだませるかで頭の良さを競いあってしまう風潮もあるように思います。しかし、私たちは、「信頼」と「敬意」と「ユーモア」の精神で、生徒の皆さんの夢を叶える進学塾であり続けたいと思っています。

次回は、グノーブルで指導している英語の特徴についてご紹介します。

グノーブル OB インタビュー

日米の垣根を越えた議論から、
国を超えた人のつながりが生まれる

僕らが参加した『日米学生会議』とは

たとえば沖縄の米軍基地問題。この問題をどう捉えていくかは日米外交の大きな問題です。そんなデリケートなテーマについても、日米それぞれの大学生が積極的に議論を交わし、未来を創っていくために相互理解を志向していく。それが日米学生会議の目的です。今年8月に開催された第65回の本会議に参加した川口真さん、そして第61回・62回参加の高田修太さんのお二人に、日米学生会議に参加することの意義をお聞きしました。

（取材・文　吉村高廣）

それぞれの思いを胸に、日米学生会議へ

川口：日米学生会議に参加した１ヶ月間は、楽しいこともあったし、大変なこともありましたが、とても有意義な経験ができたと思っています。

そもそもこうした会議があることを知ったのは、以前グノの保護者会の資料で高田さんが日米学生会議に参加するという記事を読んだのがきっかけでした。大学に入ってそれを思い出し、高田さんにフェイスブックで連絡をとったところ返信をくださり、そこから具体的な興味を持って応募してみようと決めたんです。

僕は高校の時から、将来は国際的な視野を持って活動できるところで働きたいと考えていました。そのためには世界の人と英語で議論できるようになることが必要だと思いディベートを学び始めたんです。その延長線上で大学でもディベートをやっていましたが、さらに自分を鍛えるために次のステップを真剣に考えていたところ、高田さんが参加された日米学生会議を思い出したんです。

日米学生会議はディベートではなくディスカッションです。ディベートはあるテーマについて議論をしますが、ディスカッションはインタラクティブで柔軟なものです。そこがなかなかチャレンジングで面白そうでしたし、自

高田（たかだ） 修太（しゅうた）さん
（第61回・62回 参加）
東京大学大学院
工学系研究科
社会基盤学専攻
修士課程1年
開成出身
（グノーブル２期生）

現在、大学受験グノーブルで、英語の講師としても活躍中。

川口（かわぐち） 真（まこと）さん
（第65回 参加）
東京大学 文科一類2年
栄光学園出身
（グノーブル６期生）

グノーブル OB インタビュー

日米の垣根を越えた議論から、国を超えた人のつながりが生まれる

分の視野も広がると思いました。もともと僕はディスカッションやディベートは得意な方ではありません。得意じゃないからこそ、そうしたところに身を置いて、自分を磨きたいという思いがあったんです。

高田：僕は61回に初めて参加しまして、翌年の62回では運営委員をやっています。

大学に入ってからは奇術愛好会でマジックばかりやっていたんですが、１年生の秋に東大のイベントでＯＢやＯＧをキャンパスに招いて現役の学生とテーブルディスカッションをする交流会があり、「実は自分の人生、いろんな選択肢があるんだな」ということに気づいたんです。いくらマジックが好きだからといってプロのマジシャンになるわけではありませんしね(笑)。だったらもうちょっといろいろなことをやってみるべきじゃないかなと。その頃出会ったのが日米学生会議でした。

もともとは、アメリカの学生とコミュニケーションを持って、それぞれの国の問題について議論し合うことに興味があったわけではなくて、もっと自分の視野を広げたいとか、いろんなことを経験してみたいということが一番の目的でした。

面接に行った時、英語で質問されても思うようには受け答えができず、「これは落ちたな」と思って、「これからは英語をがんばろう！」と決意を新たにしていた矢先に合格の通知をいただきました。めちゃくちゃ嬉しくて、高校の３年間お世話になったグノーブルの中山先生にメールで報告しました。東大に合格した時より嬉しい気持ちだったんです。

川口：僕も99%は落ちたと思っていまして、合格通知が4月1日に届いたので、「もしやエイプリールフールの冗談では？」と思って問い合わせたぐらいです。「本当に受かりましたよ」と言われてホッとしましたが、東大よりも厳しい倍率でしたから、受かったことがすごく嬉しかったです。

高田：日米学生会議は倍率が結構高いんです。年度によっても違いますが、アメリカ開催ですと8倍とか9倍くらい。日本開催で6倍、7倍くらいでしょうか。倍率はあまり公にされていないと思いますが、確かそのくらいです。

アメリカ人と議論するということ

高田：日米学生会議の開催理念は「平和」です。ただ最近は、そうしたビッグ・ビジョンよりも次の時代に対する投資に近い部分があるように思います。

たとえば仮に、将来日米関係が悪化したとしましょう。その時、もし日本の総理とアメリカの大統領が日米学生会議で友だちだったとしたら、どんなことがあっても最悪の事態にはならないはずです。つまり、スモールインパクトなのかもしれませんが、日米それぞれ36人(合計72人)の若者がつながっていき、そのメンバーの交友関係にも影響が及んでいけば、結果的には平和貢献につながると思います。明言されているわけではありませんが、こうした人間関係の構築に投資している側面がこの会議の大きな役割のひとつだと思います。とにかく、1ヶ月間をいっしょに暮らすという一点を考えても強烈な経験です。さまざまなイベントを通してどんどん議論を重ねていきますから、留学とはまた違った独特の体験ができます。

川口：相互の理解は本当に深まります。日米の学生が互いに自分の知らない世界を知ったり、異なる考え方に触れたりする過程で、僕自身、何度もはっとする思いをしました。こうした議論や対話からしか生まれない絆もあると思うし、参加者があらためて社会に貢献するために自分の進むべき道を考え直すほどの影響力もあります。

ただ僕は、その議論の中でフラストレーションを抱えたこともありました。会議は7つの分科会に分けられて、それぞれが1ヶ月間かけてファイナルフォーラムで発表するためにディスカッションが行われるのですが、英語力に差があって最初のうちは全くついていけませんでした。

日本側にはハンディキャップが設けられていて、Ｃ(Clarify：簡単な英語表現に言い換えてほしい時のサイン)や、Ｔ(Translate：日本語で通訳してほしい時のサイン)というハンドサインを議論の途中で出すことができます。それでもやはり会話のスピードについていけずどうしても止められない時もありましたし、英語力だけが問題ではなくて、内容自体を日本語で説明してもらっても理解できないようなこともありました。

また、僕の分科会は、「市民と政府の役割と責任」というテーマだったのですが、教育や社会保障の問題に始まり、何でも話せるテーマだったので議論の方向性がつかめず、自分が今どこにいるのか、何を議論しているのか全体像が見えないことにもフラストレーションを感じていました。

アメリカ人の議論の仕方と日本人の議論の仕方の違いということもあったと思います。日本人はあるゴールを決めて、そこに向かって話を進めていくと思いますが、アメリカ人は議論をしながら新たな話題を見つけていくところがあって、そうした部分に民族性の違いのようなものも感じて戸惑いました。

高田：議論の仕方は人によって違うとも思うのですが、全体的に見ると、「思ったことをすぐ口にする」というのがアメリカ人に対する印象でしたね。2年目は自分がリードする側にまわっていたので、話題がそれないように配慮していましたが、１年目はついて行くのが大変でした。

アメリカ人はディスカッションの訓練を受けてきていて、自分の主張を展開していくことに慣れています。「そうだよね、でも」と、すぐに自分の主張を始めるし、そもそも相手の意見を遮って自分の意見を言うことが悪いことだとは思っていません。一方、多くの日本人は相手

の意見を最後まで聞いてしまうんです。ある意味、礼儀正しいのですが、反論があれば物怖じせずに、「それはおかしい」と、はっきり言えるようなスキルを身につけることが大事なんです。１年目はうまくできませんでしたが、2年目はこの点を特に意識していました。

川口：途中で手を上げようとしても、議論に熱中しているとアメリカ人は気づいてくれない時があるんです。やっと機会が捉えられそうになると、もうその時にはその話題はすぎてしまっているみたいな。最初のうちはアメリカ人に動かされてばかりいた感じです。でも、そんな中でも「何か言おう」とは常に思っていました。何でもいいから口に出して自分の意見を伝えようということは強く意識していました。

高田：僕も最初は、「分からない、喋れない」で自信喪失気味でした。分かったふりをしていたことが先輩にばれたときには、「分からないときには分からないと言わなければ議論にならない」と叱られたりもしました。

そこで始めたのが、必死に準備することでした。たまたま参加者の中に日系アメリカ人がいて、日本語と英語のどちらもぺらぺらだったので、洗濯をしているときなどに手伝ってもらって話を作っていました。議論の始めにそれをまくし立ててしまえば、その方向に話が進むので議論しやすくなるんです。そうしたら、１週間くらい経った頃、「あれ、普通に話せているぞ」と気づく瞬間があったんです。それ以降僕は何度もブレイクスルーというか、壁を破って成長できたと思う瞬間がありました。

それから、ブロークンイングリッシュでいいと思うんです。こちらが真剣に何かを言おうとすれば聞いてくれるはずだし、理解しようとしてくれるはずなんです。大事なことは、伝えようとする意思です。発音はある程度上手くないと相手に聞き取ってもらえないですが、でも、伝えようとしてガンガン発言していくことがアメリカ人とコミュニケーションをとるには必要なことだなと思います。

議論と対話を重ね価値観を増やす

高田： 大人の視点で見れば政治的にデリケートな話題であったとしても、学生同士だからこそ率直に議論ができるところがあると思います。たとえば、２回目の日米学生会議でニューオーリンズに行った時、現地の戦争博物館を訪ねたんです。とても興味を持って、第二次世界大戦のコーナーに行ったのですが、愕然とするほど日本への原爆投下の展示が小さくしか扱われていませんでした。解説プレートには、「アメリカは正しい。原爆を落としたことで戦争を終わらせられた」といった趣旨の説明があって、「これは絶対におかしい！」と腹立たしく思い、その後、そのことで議論しました。議論は教科書の話にまで発展しました。彼らの教科書には原爆のことがどう説明されているかを聞き、僕が習った日本の教科書の話もしました。双方に、原爆問題に対するバックグラウンドがないので、アカデミックな議論とは言えなかったかもしれませんし、どちらの主張が正しいという決着がつくわけでもありませんでしたが、違った文化の中で育った者同士が、お互いの考え方をぶつけ合い共有するという意味では、あの経験は面白かったです。

川口：僕も、タブー視される政治や宗教について議論しました。分科会以外の時間では、沖縄の基地問題も話しましたし、本会議の第２開催地が長崎だったので原爆のこともやはり話題になりました。日本側の参加者が「アメリカが原爆を落としたことは絶対に許せない」と発言したことがきっかけで議論になりましたが、おそらくこ

グノーブル OB インタビュー

日米の垣根を越えた議論から、国を超えた人のつながりが生まれる

うした議論は、大人だったらなかなかできないことだろうと思いました。

参加者のアイデンティティに踏み込むこともありました。同じ分科会の参加者の中にレズビアンの人がいたんです。セクシャル・マイノリティの差別について当事者の率直な話を聞いて議論するなんて、当たり前の大学生活を送っていたら経験できなかったと思います。いろいろな価値観に触れられたと言いますか、ものを見るときの視点が増えていくという、すごく貴重な経験ができました。

共同生活で培った人間関係が財産

川口：今は会議を終えたばかりで、これから何をするかでその成果が問われるのだと思いますが、まず何を得たかといえば、情熱をもらったなと思います。

会議に参加した人は皆尊敬できる人たちばかりで、プログラムにも真剣に取り組んでいました。普通日本では何かのレクチャーを受けてもほとんど質問する人がいませんが、この会議では日米の学生ともに毎回積極的に質問をしていましたし、真剣に考えてもいました。そんな姿にエネルギーを感じました。

そして何より、多様な価値観を持った友だちを得ました。どの議論や対話も、かなりディープなところまで踏み込むので、たった１ヶ月でしたが、太い絆ができたように思います。その絆は一生保っていたいなと思っています。

高田：日米学生会議で知り合ったたくさんの友人とは、今でもつき合いがあります。当時、会議が終わって、「これって何だったんだろうな？」といろいろ考えましたが、「人間関係だったな」という結論に思い至りました。

ディスカッションも楽しいのですが、期間も１ヶ月ですし、またそのテーマについて深い知識を持っているわけではないので、その結論自体には学術的な意義もほとんどないかもしれません。ただ、ディスカッションしたプロセスには意義があったし、共同生活をする上で構築される友人関係というのが日米学生会議で得た一番の財産だと思っています。

今は研究の関係でアメリカに行く機会が多いのですが、この前ニューヨークに行った時も、ＳＮＳで「今ニューヨークにいるんだけど…」とつぶやいたら、当時の参加者の人が10人くらい集まってくれました。いっしょに食事を楽しんで、そのうちの一人は翌日丸一日、あちこち観光に連れていってくれました。もちろんメールやフェイスブックで連絡を取り合うこともありますが、実際に会うのは久しぶりです。それでも、さっと集まって何の違和感もなく話せる友人たちは、僕にとってすごく大切な財産だと思います。

１ヶ月間を共に過ごして、まさにディープなところまで踏み込んで議論をしていたからの友人関係で、このつながりは、相手が日本人でもなかなか作れないような強いものだと感じます。「いつ会っても何でも話せる仲」というのが共通認識としてあるから特別なんだと思います。

日米学生会議を経て新たな取り組みへ

高田：日米学生会議を終えた後、当時の参加者といっしょにH-LAB（エイチ・ラボ）という、日本の高校生に多様

な情報を提供して、有機的な人間のつながりを生み出すための交流団体を立ち上げました。この8月には3年目の企画を開催しました。

川口：会議が終わってからそうした計画が持ち上がったんですか？

高田：そうそう。日米学生会議の教育分科会で話し合ったことを実現しようということになって、そこで出会った人の縁がすべての基盤になっています。でも、実は、僕自身の原体験や問題意識も出発点のひとつなんです。

僕は開成出身ですが、開成には東大や医学部を目指す人が多くて、僕も「みんな東大受けるから東大だ、医学部も受けるから医学部も受けなくちゃ」と、失礼な話なんですが、無目的に両方受けて理Ⅱと慶應医学部に受かったんです。そこで初めて「自分の人生どうしよう？」と真剣に考えました。もし高校生のときに、もっと多様な情報に触れて、いろんな人と出会っていたら、大学選びをもっと違った視点で考えていたと思います。

東大に入ってからは、東大合格という目的を達成して意欲が萎えてしまった東大生も少なからず目にしていました。これも、高校時代に情報が遮断されてしまっていたことに遠因があると思います。

日本の高校生には、情報を閉ざすいろんな壁があります。たとえば、他校の同年代の生徒と深く話す機会はほとんどありません。年齢を超えた人の話もなかなか聞こえてきません。基本的には自分の学校の先輩後輩に限られてしまって、社会の各方面で活躍している年の離れた方と話す機会はまずありません。学問分野についても情報が限られていて、大学に入ってからどんな勉強ができるのかが分かりません。

こうしたことは大問題だと思います。情報がもっとあれば、いろんな方向に興味が持てるかもしれないし、将来の職業や進む大学の選択肢の幅が広がるかもしれません。何より、もっと考え深くなれると思います。

そこで、年齢もさまざま、学校もさまざま、興味分野もさまざま、国籍もさまざまな人を呼び、ある意味カオス的な場を作り、日本の高校生に数日間泊まり込んでもらい、いろんなことを考えるきっかけにして欲しいという思いから立ち上げたのがＨ－ＬＡＢです。たとえば、ハーバードから20人の学生に来てもらいましたが、高校生が現役のハーバードの学生に会うだけでもインパクトがあると思うんです。基本は英語でのコミュニケーションになりますし。

だからと言って、留学して欲しいとか、ハーバードを目指して欲しいということではないんです。

日本には、偏差値ヒエラルキーがあって、頂点に東大がある。その下にいろいろな大学がありますが、そうしたヒエラルキーを１回取っ払ってフラットにして、「さて、自分のやりたいことはどこの大学で学べるだろう」と考えて、最適な大学選びを行うことが大事です。その選択肢の中には海外の大学があるかも知れないし、やっぱり東大かもしれないし、あるいは他の大学かもしれない。そうした視点で将来のことを広く考えることが大事だと思うんです。

川口：とても興味があります。僕の学校でも東大を目指す人が結構多かったので、高校生のうちから、大学選びの視野を広げることがなかなかできませんでしたから。

グローバルに活躍する条件とは何か

高田：僕の中でグローバル人材の条件は決まっています。世界中のどこでも、誰とでも、自分の最大限のパフォーマンスが発揮できる人です。

日本語で話す時と英語で話す時でパフォーマンスが変わったらだめだと思いますし、場所が日本であろうとアメリカであろうとヨーロッパであろうと、どこであっても、どんなチームメンバーであっても同じように能力を発揮することができるべきです。パフォーマンスのレベルや質は人によって違うと思うので、別にリーダーである必要はないし、グローバル平社員でもいいと思います。でも、その前提としては、やはり英語力を鍛えることが最優先課題じゃないでしょうか。

あと、無意識に自分で引いてしまっている線を取り去っていくことです。日本と海外という考え方がまずおかしいと思います。僕は土木を専攻していますが、留学先を選んだときには、「自分の学ぶ分野で世界一のところにいこう」と思い、イリノイ大学に留学しました。もし、それがヨーロッパならそちらにいっていたでしょうし、東大が一番なら留学しようと思わなかったでしょう。つまり、海外とか日本とかじゃなく、自分にとって必要な環境があるからそこへいく。自分が学びたいものがあるからそこにいく。そんな気持ちが大事じゃないかと思います。

世界は広くていろんなものがあるので、自分の興味にしたがって行動すべきだと思います。そんな発想力と行動力を持つことがグローバルに活躍したい人には必要じゃないでしょうか。

川口：言語よりも自分の持っている意識の問題じゃないかと思います。それは、挑戦してみようという意識です。

僕が参加した日米学生会議には、アメリカ側の参加者として日本人の学生が何名かいました。そうした人たちは多少の不安があるにしても、日本から飛び出してみようと考えた人たちだと思います。新たな世界に飛び込むことで、もまれながら成長していくというスピリットみたいなものが、グローバルに活躍していくためには必要じゃないかと思いました。

あとは、コミュニケーションしようという意識です。言葉はもちろんですが、対話に向かう姿勢も大事です。相手を排除してもだめだし、自分の殻に閉じこもっていてもだめだと思います。日米学生会議を通して、自分とは異なる価値観や考え方があるのだと、頭で分かるだけではなく体験として実感しました。世界にいるさまざまな人を理解し、また、こちらの考えを伝えるためには、意識の持ち方が何より大切だと思います。僕自身、自分の経験が少ないので、なかなか自信を持って言えませんが、こうしたことは、何事にも恐れないでいきたいという自分に対する戒めでもあります。

東大の新たな試み『FLYプログラム』に、グノ7期生2名がエントリー!

東大が2013年度からスタートさせた、初年次長期自主活動プログラム「FLY Program(Freshers' Leave Year Program)」。このプログラムは、24人の応募者の中から選ばれた11人の学生が、通常の大学生活の開始に先立ち、社会における主体的な体験活動(ボランティア体験、国際交流体験、就業体験など)を１年間実施することを通じて、大学での学びの意義や目的を再発見しようというもの。そしてこのプログラムに、グノ７期生の黒木あたるさんと山田智子さんが、それぞれの思いを胸にエントリー。活動真っ只中のお二人がグノレットに投稿してくださいました。

この1年で、これまでとは違う自分になります。

黒木(くろき) あたるさん(東大文科一類1年・駒場東邦出身)

スペインで古城修復のボランティアに参加

私は好きなことはあっても、一生涯を賭してまでやりたいことはなく、将来像を描いても他人事のようにしか思えませんでした。

ＦＬＹに応募したのも、休学することで大人になることを遅らせたかったからです。私の趣味は読書と旅ですが、二つの共通項は現実逃避です。その時の私にとってのFLYとは、迫り来る未来からの逃避行でした。

６～８月はヨーロッパ、11～２月は東南アジアにおいて、ボランティア活動を行いつつバックパッカー旅をする。これが私の一年間の計画です。シンプルですが、ここに至るまでには紆余曲折がありました。周囲の人との相談の中で出たさまざまな案を下し、最終的に残ったこの計画には私の興味がつまっています。具体的には、旅、ボランティア、他国の人との交流です。

今は計画の前半を振り返っています。「自分探し」という言葉は嫌いですが、ＦＬＹへの参加はそれに近い結果をもたらしました。ＦＬＹの特徴は「自由」です。いつどこで何をしてもいい自由です。ただし、計画の準備から後始末まで、全ての結果を受け止めるのは自分。まさに私に欠けているものでした。

当然その中では自分を強く持つことが必要になります。親や大学側に意見され、その都度「それは違う」と自分の考えを口に出す度、周りに流されていた昔の自分が少し変わったように思います。

「逃避行」の中で、奇しくも私は前進しています。だから今、東南アジア行きだけでなくその後の人生においても、自分が何を思い、どう変わっていくのかを楽しみに日々を過ごしています。

自分を鍛え、人と違う強みを必ず見つけます。

山田 智子さん(東大文科一類1年・桜蔭出身)

Niagara Fallsを背景に1年間の決意を誓う

東大が今年から始めたFLY Programに参加して、私は今カナダのトロントにいます。

高校の頃から興味はありましたが、応募するきっかけになったのは東大に入ってからの２週間で経験した"衝撃"です。出会う人たちは優秀なだけでなく自分のアイデンティティとなる多様な強みを持っているのに、自分には何も自信を持てることがないなと。ＦＬＹへの参加は、いつも前を走る人についていくだけだった私にとって、他人と違う強みを作るという点で魅力的でした。

そうして１年休学することになった私ですが、活動はほぼトロントで行います。７月に日本を発ち、トロントへ来て2ヶ月になります。10月初めまでは語学学校に通い、ワーキングホリデーのビザ(通学と就労が認められている少し特別なビザ)を持っているのでその後は来年３月まで仕事やボランティアをしつつ英語の勉強、観光をする予定です。現状はというと、Grammar、Writing、ReadingはGnobleに通っていたおかげで(といってもGnoble生時代トップクラスではありませんでした)語学学校ではトップクラスですが、SpeakingとListeningがまだまだで、カフェでCanadianと一緒に仕事がしたいという最大の夢が叶うのか不安でいっぱいです。日本語でさえ話すのが苦手なので英語で全く知らない人たちと会話するのは本当に大変ですが、毎日１歩ずつでも自分を鍛え、視野を広げていけたらと思っています。

日本は次第に寒くなっていくと思いますが、がんばっている後輩たちを太平洋の向こうから応援しています。

Harvard University

風早(かざはや) 智孔(ともなる)さん(ハーバード大学２年／筑駒出身)

グノレット10号でハーバード大学進学直後の初々しいレポートをご紹介した風早智孔さん。大学生活も2年目を迎え、刺激的な毎日を過ごしていらっしゃるようです。中でも力を入れているのが所属しているオーケストラの活動。２週間にわたる演奏旅行を通じて、世界を見渡す新たな問題意識に目覚めたそうです。

最後のコンサートを終えて(左から4人目)

オーケストラHROの一員として、イスラエル・ヨルダン自主企画演奏旅行へ。

5月半ばに1年生最後の試験が終わり、夏休みが始まりました。1年生は一斉にドームからハウスへの引越しです。自分の住むことになるハウスの地下倉庫に荷物を運び、9月の入寮まで預けます。それが済むと、それぞれの夏休みが始まります。インターンをする人や、学校近辺に友人同士で家を借りて住みながらサマープログラムに参加する人、実家に帰る人などさまざまです。

僕は所属するオーケストラ(ハーバード・ラドクリフ・オーケストラ=HRO)の自主企画演奏旅行に参加し、6月初旬から2週間にわたりイスラエル・ヨルダンを訪れました。訪問先決定に際しては、音楽を通じた国際交流のみならず、社会的・政治的側面で、参加者に多くの体験や学びがある場所を選ぶよう団体として心掛けています。

今回のツアーの目標は、１. 政治的対立の激しい地域で公演を成功させる。２. 現地を訪れた実感や人々との交流などを通して対立や紛争の実態を学ぶ機会とする。３. ツアーの全収益をシリア難民に寄付するなどの社会的貢献をする。などでした。

僕たちは、テルアビブ・エルサレム・ベツレヘム・ナザレ・アンマンなどを巡り、現地の学生や音楽家などと交流しながら、4回の演奏会を行いました。また、イスラエルで1校、パレスチナで2校の学校を訪問しました。

演奏旅行参加者の集合写真(ヨルダン)

パレスチナでの演奏会が突如中止に。その背景にあったものは…

エルサレムという土地は「始まり」とも言うべき空気を持つところで、僕は魅了されました。ユダヤ教・イスラム教・キリスト教の共通の聖地であるエルサレム、そんな知識だけでは分からなかった実感を得た気分でした。また、学びとしては、これまで表面的な理解さえ覚束なかったパレスチナ問題について考えるようになりました。

具体的には、パレスチナ自治区であるベツレヘムで予定していた演奏が中止になったことがとても印象的な出来事でした。現在、パレスチナ側はイスラエルに対して「文化的ボイコット運動」を展開しています。「イスラエル・ヨルダンツアー」というタイトルを掲げ、イスラエルで演奏を行った団体がパレスチナで演奏することを許可するわけにはいかない、というパレスチナ自治区の見解が中止理由です。演奏は実現できませんでしたが、交流会は持たれました。紛争解決に向けての「文化的ボイコット運動」の良し悪しや、和解についてなど議論は白熱し、1時間の予定が3時間に延長されるほどでした。

他にもナザレでは訪問先学校関係者のアラブ人キリスト教徒から話を聞いたり、イスラエル工科大学ではユダヤ人大学生たちと座談会を行ったりと、さまざまな立場の人と交流でき、宗教・民族・歴史が複雑にもつれあう中東問題の一端を垣間見た気がしました。普段、歴史や経済への興味が薄い僕ですが、現地の実態を実感する中で、勉強しないといけないと強く感じました。

ハーバードには幸いいろいろな国の出身者が在籍しています。彼らと交流しつつ、広い知識を蓄え、このような世界の抱えている問題に興味を持ち続ける努力をしたい。それがハーバードでの２年目に先立つ演奏旅行において、僕が強く心した思いです。

中学受験グノーブル、スタート！

中学受験グノーブルが目指す これまでの日本には無かった 教育機関とは

グノーブルは、今年から中学受験生を指導する中学受験グノーブルと個別指導のグノリンクをスタートさせました。そこで、長くサピックスで中学受験生を指導し、今年から中学受験グノーブルで教壇に立つ眞田素先生に、中学受験グノーブル設立にあたっての抱負や、教育理念、授業の特色などについて話を聞きました。本号と次号の2回に分けて紹介します。

東京校 算数担当
眞田 素

難関中合格後を含めた 一貫した教育を

――眞田先生が受験指導に関わるようになったきっかけとこれまでの経歴を教えてください。

眞田　２ヶ所の大手の塾で小学生を対象にした指導を経験した後、進学教室サピックス小学部に移りました。そこでは20年ほど算数を教えるかたわら、自由が丘校などの校舎の室長や小学部全体の運営を行う教務部の本部長を経てきました。

――サピックスからグノーブルに移られた動機は何だったのでしょうか。

眞田　サピックスでは、多くの卒業生を送り出してきました。もちろん、難関中と言われる中学校に合格する生徒たちとも数多く接してきました。ただ、自分として常に歯がゆい思いをしていたことがあります。それは、合格した後の彼ら彼女らの学習や成長にほとんど関わることができなかったという点です。実は、難関中に合格したその後を含めて、一貫した質の高い教育を実現できる環境というのは、今までの塾の中には見当たりませんでした。

私はかねてより中山代表、そして大学受験グノーブルの教育理念である「知の力を活かせる人」を育むという考え方や、一人ひとりに向き合った指導を行っているグノーブルのあり方に共感を覚えていました。ここであれば、中学受験終了後も一貫した教育理念で子どもたちを指導できる環境が実現できるのではないか、その思いがより大きくなったことが新しい場を求めた理由です。そして、同じ志を持った先生方が、この夏から同じグノーブルで中学受験を目指す生徒を教えることになりました。

眞田 素
東京校 算数担当
サピックス元教務本部長。男女御三家中学をはじめ、最難関中学に数多くの生徒を合格へと導きます。

将来を担う 子どもたちのために

――小・中・高と一貫して質の高い教育を提供することが先生の目指される教育機関だということでしょうか。

眞田　その通りです。ただし、質の高い教育は共通の教育理念のもと、一貫したカリキュラムで行われるべきであると考えています。中学入試を終えた子どもたちは、多くの勉強経験を通して非常に高い学力を持っています。その学力を把握した上で、中学生を教える先生方には教えていただきたいのです。すなわち中1で学ぶ数学が受験算数を引き継ぐ形で行われるべきであると考えています。

また、私どものグループの中には、小学生までの子どもたちに英語を教えるグノキッズがありますが、そこで学んだ内容、英語力を把握している先生が中学で引き継ぐ形をイメージしています。

より子どもたちの多様性に応えられる指導を小・中・高を通して実践し、将来を担う子どもたちを一人でも多くここから育てていきたいと思っています。それが私の目指す教育機関であり、それを実現することが自分のつとめであると考えています。

（以下次号）

先生紹介

平野 大樹
自由が丘校 算数担当
サピックスで長年トップコースを担当。パワフルで熱い授業は多くの生徒たちに人気を博しています。

竹下 勇児
成城学園校 算数担当
サピックスで長年トップコースを担当。論理的で明解な授業は数多くの生徒を最難関中学合格へと導きます。

三浦 勇二
西船橋校 算数担当
サピックスの初期からトップコースの指導を、また大学受験での数学の指導も高いレベルで並行してこなします。

東京校、自由が丘校、成城学園校、西船橋校が開校

生徒一人ひとりに向き合う少人数制集団授業

「少人数制集団授業」――。生徒一人ひとりに向き合い、自発的な学びを促すために中学受験グノーブルが実践する学習の形態です。

中学受験グノーブルでは、7月末の夏休みシーズンに成城学園校、東京校、自由が丘校を開校したのに続いて、9月に西船橋校を開校しました。いずれの校舎も少人数制集団授業を行うための学習環境を整えています。

クラスは、先生と生徒が十分なコミュニケーションを取れる15名程度の少人数に限定しています。先生との対面授業でのやり取りを通して、生徒が問題を解ける楽しさを実感し、入試で必要な思考力を培うのです。

小学校4、5年生には「単元別実力養成特訓」の授業を開講、「平面図形」「文章題」など単元ごとに基礎から応用、発展レベルの問題を学んでいきます。小学校6年生に対しては「志望校別突破コース」を開講し、志望校の合格へ向けた実戦力を養います。

各校舎には、個別指導グノリンクを併設しており、一人ひとりの学習状況に合わせた1対1（または1対2）の個別指導を行います。中学受験グノーブルと併用して学習を進めることも可能です。

なお、中学受験グノーブルは、来年2月から小4～6年生を対象に、算数に加え国語、理科、社会の4教科を開講します(小3のみ算数1教科で開講)。

教室は15人程度の少人数制の環境を整え、先生が生徒一人ひとりと向き合う授業を実践している。
個別指導グノリンクを併設している（写真はいずれも自由が丘校）。

小学校6年生の志望校別突破コース

曜日	時間	東京校	自由が丘校	成城学園校	西船橋校
月	16:50～18:50	女子学院中	慶應普通部	桜蔭中・雙葉中	桜蔭中
	19:10～21:10	駒場東邦中	麻布中	開成中	開成中
水	16:50～18:50	難関中・雙葉中	駒場東邦中	女子学院中	―――
	19:10～21:10	開成中	桜蔭中	麻布中	―――
金	16:50～18:50	桜蔭中	女子学院中・雙葉中	難関中	―――
	19:10～21:10	麻布中	開成中	駒場東邦中	―――

中学受験グノーブル説明会のお知らせ

定評のある算数の内容はもちろんのこと、記述添削や思考力を早くから重視したカリキュラムや、ITを活用した理科・社会の授業など、2014年の中学受験グノーブルの指導の概要についてご説明いたします。

東京校　11/12（火）
自由が丘校　11/16（土）
成城学園校　11/15（金）
西船橋校　11/11（月）

それ以外の日程についてはHPをご覧ください。
www.gnoble.com

中学受験算数を基礎から入試まで効率よく学ぶ

『G脳（グノ）-ワークアウト』算数を刊行

『G脳-ワークアウト』算数は、「4年生版」「5年生版」などを順次刊行しており、いずれもインターネット書店アマゾン（amazon.co.jp）で販売しています。

中学受験グノーブルは、算数を基礎から入試レベルまで楽しく効率よく学ぶ問題集『G脳（グノ）-ワークアウト』算数を編集・発行しました。

『G脳-ワークアウト』算数は、単元ごとに問題が掲載されているのが特長です。一つの単元は約30回の小テストで構成されており、基本的な問題から、応用・発展レベル、4、5年生でも解ける実戦的な入試問題レベルまで、ステップアップしながら学習することができます。

紙面はドクターGnoと6人のキャラクターとともに学ぶ構成で、難しい問題にはポイントを押さえた解説がつくなど、生徒が「楽しく解けて、算数が好きになり、得意になる」ように工夫を凝らしています。日々の到達度を確認したり、4、5年生の月例のテスト対策や弱点の補強、受験算数を初めから勉強したい受験生にとって格好の問題集です。

『G脳（グノ）-ワークアウト』算数（以下、ワークアウト）の制作に携わった先生たちにお話を聞きました

楽しく解けて、算数が好きになり、得意になる

「これまでの問題集や塾のカリキュラムに沿ったテキストでは、生徒は同じ単元の類題を探すのに苦労していました。そこで、ワークアウトを作成するにあたり、問題を単元ごとに効率よく学習を進めることができるよう工夫を凝らしました。たとえば、『速さ』に関してまとめたページでは、決まった時間に着かない、遅れる、早く着くなどの問題が出題され、学習を進めることができます」**眞田 素**

「学習したい単元だけをピックアップして勉強できるので、最後の追い込みでの弱点補強に使ってほしいですね」**竹下 勇児**

「まだ意欲的に算数に取り組むまでに達していない生徒にも、問題を楽しく解けて、算数が好きになる内容になっているはずです」**三浦 勇二**

「苦手な単元を克服するのに、ワークアウトを使うことによって適確に指示できるようになりました。１ページに上下2問が掲載され、上の問題を解く考え方で下の問題も解ける形式になっています」**平野 大樹**

すでに中学受験を経験し、難関中学に通う中学生に『G脳-ワークアウト』算数を読んでいただき、感想を求めるモニター調査を実施しました。「ストーリーがおもしろくて、どんどん解き進めたくなるような問題でした」（筑波大学附属中学在籍）など、好意的な意見が多く寄せられました。

英会話グノキッズ、10月スタート!

PBLに基づく 全く新しいレッスンスタイルで 生きた英語を楽しく学習

2013年10月から開校した英会話教室「グノキッズ」──。4歳から小学校2年生までを対象に、ネイティブの英語に親しみながら、生きた英語を楽しく学ぶことができます。そこで、授業を担当するリサ・チン先生、セーラ・グラント先生、ジェイミー・プリチャード先生に、レッスンの特長を聞きました。

──10月から「グノキッズ」が開校しました。レッスンにはどのような特長があるのですか。

リサ　PBL(Project-Based Learning)という米国で生まれた学習方法を取り入れています。英会話を単なる繰り返しで覚えるのではなく、一つの「プロジェクト」(テーマ)を設定し、それをレッスンを通じて作り上げながら英語の学習を行っていくことをコンセプトにしています。「プロジェクト」を通して、英語に親しんでもらうのです。

── 具体的にはどのようなレッスンになるのですか。

セーラ　一つのテーマについて8回(8週間)のレッスンを行うカリキュラムを編成しています。たとえば、「クリスマス」をテーマにしたレッスンでは、「クリスマスパーティーを迎える準備をする」というプロジェクトを進めながら英語を学んでいこう、というものです。そして最終週には、実際に保護者を呼んでクリスマスパーティーなどのイベントを行います。

ジェイミー　クリスマスパーティーの準備には、飾りつけ、招待状を書く、ケーキや料理を作る、ゲームを用意するなどがあります。こうした目的をもった行為を通じて、表現を学び、また英会話に馴染んでいってもらうのがグノキッズのレッスンの大きな特色です。

リサ　たとえばクリスマスツリーの飾りつけをするために、形や色を学習したり、パーティーのお菓子を作るために、その材料を英語で説明できるように学習します。このように、実際の行動を通じたレッスンをすることで、生きた英語を身につけることができるのです。

ジェイミー　基本的に1クラスに2人の先生がつきます。先生同士の自然なやりとりをふんだんに耳にすることができることもグノキッズの特色ですね。

セーラ　8週間で一つのテーマを学習するサイクルで、年間を通すとテーマは6つになります。

── 他には、どのようなレッスンがあるのですか。

リサ　1回のレッスン時間は1時間半です。メインのプロジェクトタイムは約30分間ですが、レッスンの導入として、歌を歌いながらウォーミングアップしたりする「ウォームアップ エクササイズ」があります。他には映像で英語に親しんでもらう「ビデオ」、英語の音の認識や発音の練習をするための「フォニックス(PHONICS)」、そして絵本を読み聞かせる「ストーリータイム」などのさまざまな時間を設けています。

セーラ　従来使われてきたような、画一的な教科書はグノキッズでは使いません。使用するほとんどの教材は私たちが作成したオリジナルです。ビデオにはオリジナルのキャラクターのAlexとZoeが登場します。

リサ　グノキッズのレッスンは、テキストを使って英語を暗記するようなレッスンではありません。私たちはアクティビティと言っていますが、体験型かつ能動的な学習体験で、自然に英語が身につくような工夫をしています。

ジェイミー　教室の雰囲気にも配慮しています。英語は一つの文化ですから、子どもたちが教室に入ったら、海外の学校で学んでいるかのような雰囲気になるようにしています。

リサ　グノキッズで学ぶことで、子どもたちが英語で会話することが楽しいと思ってもらえたら、私たちも大変うれしいですね。

リサ・チン
Lisa Chinn

セーラ・グラント
Sarah Grant

ジェイミー・プリチャード
Jamie Pritchard

GnoKids
英会話 グノキッズ

Alex(左)とZoe

オリジナルの教材を使って楽しく英語を学ぶことができます

英語絵本の読み聞かせ会とハロウィーンパーティーを開催

グノキッズ自由が丘校と成城学園校は10月、子ども英会話イベントとして「英語絵本読み聞かせ会」を開催しました。両校それぞれ2日間にわたり開かれ、近隣に住んでいる子どもたちとそのお父さん・お母さんが集まって連日の盛況。外国人の先生たちが、米国で人気の絵本『Pete the Cat:I Love White Shoes』の読み聞かせをしたほか、一緒に歌を歌ったり、絵本の中に出てくる単語を使ってゲームをするなど、楽しいひとときを過ごしました。なお、読み聞かせ会は満席が相次いだため、急きょ追加開催も行いました。

続いて10月19日には、同じく子ども英会話イベントとして「ハロウィーンパーティー」を開催。本場の"trick or treat(お菓子をやりとりする伝統的な習慣)"やハロウィーンに関する絵本の読み聞かせをしました。

※ 無料体験レッスンを受付中です。お申込みはHPまで。
www.gnoble.com

まるで外国の教室にいるかのような雰囲気のグノキッズ自由が丘校

グノキッズの先生たちが絵本を楽しく朗読しました